

かれるのは彼等である、招かれてその小供を相して生涯の運命を占示する、親々はこの占示によりて自分の小供の將來に望みを囑すると云ふ有様である、人が病氣をするとその病床に臨んで祈禱をする、藥を拵らへてあてがふ即醫者の代りをする、そうして面白いのはその病氣が自然に出た病氣であるか、或は他人の呪咀によるものであるかを判断する、愈々死んだとなるとまた彼等の出る番で、現今滿洲等でやると云ふ葬式の泣き役をつとめるのである、宮廷内におくられる物品は、前にも云ふた様に必ず火の清めをうけねばならぬ、そうしてその清めは巫者の手によつて行はれる、即ち巫者の手を一度經なければ宮廷の中に、ものを入れるわけには行かないのである、獨りこれのみに限らない、人の死んだあとゝか、雷に撃たれたものなどゝ同居した人とか、物とか、すべて或る穢れにじんだと思はれるものは、また必ず巫者の清めをうけて後でない、人中に出ることも出来なければ、人の前に持ち出すことも出来ないのである、一體彼等の占卜はどんな風にやるのであるかと云ふに色々方法があつた様である、あるものは神を呼び出して自分にのりうつらせるので、夜中占て貰う人をよびよせて食物を卓上に供へさせ、眞ッ暗な中で太鼓をもち出してはげしく地をたゞき呪文を稱へ、しまいには狂動して自分を縛せしめる、そうして茲に神がのり移つたとして供へてある食物を食べ、徐ろに人の間に答へるのである、これが最も普通のものであつた様であるが、尙ほ此外に自分が神にたづねてその宣託をかたり、或は紙を水に投じて顯はれる文字とか畫とかで占つたり、火に焼いて見たり、或は馬などの動物にたゞして答を得たり、種々雑多なやり方があつたことがしるされてある、更にまた運命を星によりて占ふこともやつたとかいてあるものもあるが、これは支那から當時蒙古に來た人たちが天文を見て季節等のことを知つたのを誤つたものであろう、蒙古の巫人が星の運行に鑒みて事を占卜した